

國學院大學學術情報リポジトリ

戦前期日本の毛織物工業における産地織物業の展開：
尾西機業地を事例として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石井, 里枝 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001023

戦前期日本の毛織物工業における産地織物業の展開－尾西機業地を事例として－

■ 石井 里枝

▶ 要 約

ヨーロッパでは、綿工業などと同じく毛織物工業も在来的な展開がみられた繊維産業であったが、日本では毛織物工業の展開は近世においてほとんどみられず、近代になってから本格的に産業が勃興した。本稿の課題は、日本では近代的な繊維産業として位置づけられる毛織物工業の戦前期の展開について、尾西機業地におけるケーススタディを中心に論じることである。古くから絹織物や綿織物といった在来的な織物の産地として展開していた尾西機業地では、明治中期以降、大正期にかけて毛織物生産への製品転換がみられ、第一次世界大戦期以降織機の動力化（力織機化）が進み、その後国内における毛織物生産の一大産地へと成長した。そこでは、地元機業者だけでなく技術者兼教育者、流通業者といった、多くの機業関係者の努力、協力がみられたのであった。

▶ キーワード

毛織物工業 尾西機業地 製品転換 力織機化

目次

1. はじめに
2. 日本における毛織物工業の展開についての概観－近世から近代へ－
3. 尾西機業地における在来的な織物業の展開－毛織以前の尾西地域－
4. 毛織物への製品転換と尾西機業地
5. 尾西機業地の飛躍的な発展
6. おわりに

1. はじめに

本稿の主な課題は、日本では近代的な繊維産業として位置づけられる毛織物工業の展開について、尾西機業地におけるケーススタディを中心に明らかにすることである。

イギリスをはじめとするヨーロッパでは、綿工業などと同じく毛織物工業も在来的な展開がみられた繊維産業であった。しかしながら、日本では毛織物工業の展開は近世期においてほとんどみられず、そのはじまりは、近代の到来を待つのであった。毛織物工業は、在来産業に属する綿織物業や絹織物業とは異なり、その機械および技術は外来のもので、明治中期以降に勃興した毛織物生産企業も、このような生産条件を基礎とした。近代日本における毛織物工業の展開においては、主として「会社筋」と称される、大規模工場、大企業による生産と、「組合筋」と称される、中小工場、企業を中心とする産地織物業者による生産がみられた。本稿で主な検討対象とする尾西機業地における織物業は、この後者に属する¹。ここで、織物業機業地としての尾西地域とはいかなる地域をいうのかというと、尾州の西方という意味で、行政地域的には一宮市、中島郡、葉栗郡と津島一帯、丹羽郡の一部にわたる地域（現在の愛知県一宮市、稲沢市、江南市、津島市、丹羽郡）を指すというが²、尾西毛織工業協同組合の地域としては、1992年時点における愛知県一宮市、尾西市、稲沢市、および中島郡（祖父江町・平和町）といった北西部の地域を指す³。尾西機業地における毛織物生産高は大正末期には全国の3割を占めるに至り⁴、昭和初期には愛知県は国内生産高の5割を超える一大生産地となったが、ここでの尾西機業地の果たした役割は極めて大きい。なお、戦後の国内における毛織物業は、復興期から高度成長期にかけて戦後復興の旗頭、輸出の花形産業として大きく成長したが、ここでも尾西機業地は、日本における最大の毛織物産地として、その生産を牽引した⁵。

本稿に関連する研究史について整理すると、戦前期における概説的な研究として、佐々木秀賢（1936）⁶、大中満洲男（1943）⁷、戦後期には伊東光太郎（1957）⁸、名古屋通商産業局（1955）⁹などのほか、各企業における社史¹⁰などもある。また、国内における毛織物工業の発展に関しては、たとえば尾西織物業の展開について、森徳一郎編（1939）¹¹、玉城肇（1957）¹²、日本繊維新聞社編（1958）¹³、塩澤君夫・近藤哲夫（1985）¹⁴などがある。このように、日本における毛織物工業に関する研究についてみると、毛織物工業が輸出産業としても大きく発展した1930年代、そして大衆消費社会が確立した戦後の高度成長期において概説的な研究がみられ、また、同業組合などが出版した文献¹⁵もある。しかしながら、同じ繊維産業でありながら多くの研究の積み重ねがみられる綿業、絹業に比し

て、毛織物工業に関する研究の蓄積はそう厚くない。そのため、研究史上の空白を埋め、毛織物工業の展開について概観することで、毛織物業研究の重要性について明らかにする意義は大きい。

それでは、戦前期をつうじて日本有数の毛織物産地へと成長した尾西地域では、具体的にどのような毛織物工業の展開があったのであろうか。産地をとりまく状況はどのように変化・進展していったのであろうか。戦前期におけるダイナミクスな展開がみられたものの、研究史においては必ずしも十分に明らかにされてこなかった毛織物工業、産地毛織物業の展開のあり方について、本稿では、できうる限り詳細に明らかにしたい。とりわけ、尾西機業地について具体的に、①近世期から続いた綿（絹）織物業から毛織物業への転換の過程、②毛織物業における力織機化（機械化・近代化）の過程、③それに関わった企業家たちの動き、に力点を置きながら論じていく。

本稿の構成は、次のとおりである。第2節において、日本における毛織物工業の展開について、その始期から簡単にふりかえることにする。第3節では、愛知県尾西機業地を事例として、その機業地としてのはじまり・展開について、主に明治中期までの時期について概説する。第4節では、明治後期から大正期にかけて、尾西機業地が毛織物の産地へと転換し、発展する過程について明らかにする。第5節では、昭和戦前期を主な対象として、尾西機業地が日本における毛織物生産の一大産地として成長する過程について概観する。第6節はまとめにあてられる。

2. 日本における毛織物工業の展開についての概観 —近世から近代へ—

本節では、まず日本における毛織物工業の展開について概観することにする。なお近世および明治初期については、対象を毛織物工業に限定せず、牧羊、紡毛を含む羊毛工業の展開についても適宜ふれていくことにしたい。

毛織物が日本に伝来したのは、綿織物や絹織物と比べると比較的あたらしく、元亀、天正の頃（1570～80年代頃）とされている¹⁶。大航海時代以降におけるヨーロッパとの交易のなかで、和蘭船の渡来などによって日本にもたらされた。しかしながら、毛織物は武将の陣羽織、鞍覆といった特殊な用途に用いられたに過ぎず¹⁷、極めて貴重で贅沢な織物として、一般には普及するものではなかった。それが、17世紀に入り徳川時代へ移行すると、庶民の生活水準の向上のなか、次第に輸入毛織物の総量も増大した。

18世紀後半以降、イギリスでの産業革命にともなう毛織物生産手段の機械化により、毛織物生産量の増加が生じ¹⁸、徳川末期には対外貿易においても薄地毛織物取引量の増加がみられるようになった。毛織物取引量の増加のなか、18世紀末の寛政期以降、幕府財政の健全化の一環としてとられるようになった国産奨励・輸入防遏策の影響もあいまって、牧羊および毛織物の国産化が試みられた。日本における毛織物製造は1805（文化2）年のことであり、当時の長崎奉行であった成瀬因幡守が中国から数頭の緬羊を買い入れ、肥前浦上村で飼育したのが最初であるというが、この事業は頓挫した。続く1811（文化8）年には、徳川幕府が長崎奉行に命じて中国から数十頭の緬羊を購入し、巢鴨の薬園において飼養した。この事業は成功して緬羊は300頭ほどまで増殖し、羅紗や呉縞の試織も行われたというが、その後薬園の火災により緬羊が悉く焼死し、結局この事業も挫折したという。そして、近世期における牧羊および毛織物製造のそれ以降の記録は残されていない¹⁹。

このころ輸入された毛織物について詳しく述べると、金巾、更紗、天鵞絨、棧留縞、羅紗、呉縞服綸（後のモスリン）などがその品目としてあげられる²⁰。徳川末期には兩合羽、火事羽織、冬羽織、帯、袋物、女物の襦袢などとして一般に使用されるようになった。また、呉縞服綸の帯などが中流女子の嫁入調度として用いられるようになった²¹。

幕末期、1858年に安政の5カ国条約が締結され、翌1859年7月より神奈川（横浜）、長崎、箱館の3港が開港して本格的に居留地貿易が行われるようになると²²、例えば、長崎港ではイギリス、フランス、アメリカ、ロシアの交易船が入港するようになり、輸入される毛織物も、羅世伊多、イタリアンクロス、フランネル、ブランケットなど多種にわたるようになった²³。長崎において取引されたそれは大阪の間屋などに仕入れられ、消費地へともたらされていったというが²⁴、新たに貿易地として開港した横浜でも毛織物の取引は活発であった²⁵。開港後の横浜貿易における全輸入品に対する毛織物輸入の割合は、1865年には全体の43.7%に達し、輸入数量は238,946反、価額は5,758,678ドルであり、呉縞、羅紗、毛布などが多く輸入された²⁶。

このように、近世期をつうじて日本では、毛織物が次第に一般社会に浸透し始め、さらに幕末期に開始された居留地貿易により、毛織物の輸入量は急増した。しかしながら、毛織物取引量の増加にもかかわらず、日本において本格的な毛織物国産化が試みられるのは、明治期以降のことであった。

次に、明治期以降の毛織物工業の展開について概観しよう。1870年には太政官布告により兵制が制定され、陸海軍の服装が制定され、続く1871年には羅率（巡查）の制服、1872年には郵便夫、鉄道員の制服が制定され、一般官吏も洋服を着用するようになった²⁷。このような洋装に要する羅紗や毛布などの毛織物が軍官需用として採用され、広く需要されるようになった²⁸。

民間においても、それまで多く輸入されていた呉呂にかわり、モスリンが友禪縮緬の代用として用いられるようになった²⁹。近代に入り、はじめは軍官需用としてその需要が増加した毛織物は、ついで民需用としての需要が増加し、さらに1880年代に入ると、民需用のモスリンにおいては全国的な市場が形成されるようになった³⁰。こうしたなかで、毛織物は依然として輸入に依存する状況であり、対外支払額が増加していったため、毛織物国産化の必要性がますます生じるようになった。

このような状況のなか、当時の内務卿であった大久保利通は、1876年、毛織物の国産化の必要性について、太政官に具申書を提出した。大久保の建議に基づき、国内における毛織物工業の育成を目指し、羅紗製造所の建設が試みられた。羅紗製造所は、南千住に建設されることになり、1879年9月に官営千住製絨所が操業を開始した。なお、千住製絨所は日本における最初の毛織物工場であり、外国人技師による技術指導が行われた。同製絨所は日本で最初の近代的設備を備えた羊毛紡織工場であり、同時に民間羊毛企業の設立を誘発する、指導工場としての役割を担った。この時期以降、民間において毛織紡績所が開設され、1886年には後藤恕作により東京毛布製造会社が設立された³¹ほか、1883年には大阪北野では、大阪毛布会社が設立され（資本金20万円）、これを発端としていくつかの毛布製織工場が設立された。1887年には東京毛糸紡織会社が資本金30万円で設立され、1893年には資本金を50万円に増額して東京製絨株式会社と改称した。1888年には東京に日本毛布製造会社（資本金10万円）、大阪には大阪毛糸紡績会社（資本金10万円）が設立された。このようにして、民間の羊毛企業も誕生していったが、日清戦争期までは東西合わせて10社にも満たず、コスト、品質面で輸入品に対抗できなかった³²。

このように、日本では明治期に入り毛織物工業が開始され、第一次企業勃興・産業革命の到来のなかで、大規模な企業の設立が開始した。その後、日清戦争における勝利を経て第二次企業勃興期を迎えたが、日清戦時期における軍需の増加、日清戦後の好況時における民需（和服用毛織物需要）の増加、さらに国内羊毛工業の育成をめざす関税改正³³という動きのなかで、毛織企業熱が誘発された³⁴。和服用毛織物は主にモスリンを中心とするもので、友禪加工が可能になったことよりモスリンの輸入が急増していた。また、軍絨、軍隊毛布等への利用は、赤毛布、ラシャへの需要増加としてあらわれた。こうしたなかで、資本規模の比較的大きな企業の設立がみられるようになり、1894年11月、毛織布合資会社が設立され（資本金1万円）、1896年3月には東京モスリン紡織株式会社（資本金100万円）が、そして同年11月には松井モスリン工場（資本金50万円）、12月には日本毛織株式会社（資本金50万円）が、それぞれ設立された³⁵。ここで、後に日本羊毛工業の雄となる³⁶日本毛織は、神戸の商人であった川西音松らを中心に設立されたものであり、1899年5月に操業を開始した。

このような過程を経て、明治期に入り、日本において毛織物工業は大企業を中心に確立していった。とりわけ、モスリン生産は大工場制に適っていたため発展が顕著であり、その生産規模は急拡大した³⁷。しかしながら、大企業における大量生産の主要製品は、毛布やモスリンといった、少品種多量生産に適した品目がその製品であった。それに対して、多品種少量生産に適した洋服地生産などを主として担うことになるのは、大正期以降急速に発展する、織物産地における中小織物業者たちであった。とりわけ、大正期から昭和戦前期にかけての尾西機業地における毛織物生産の増加は著しい。そこで次節以下では、この尾西機業地についてやや詳しく検討を行うことにしたい。

3. 尾西機業地における在来的な織物業の展開 —毛織以前の尾西地域—

ここでは、尾西機業地における織物業の展開について、毛織物生産へと移行する明治後期以前の時期から述べていくことにする。すでに述べたように、日本において毛織物工業は、他の織物業のような在来的な展開がみられた産業ではなく、近代に入り、海外からの技術および原料の移入、移転をつうじてその発展がみられた。そして、産地織物業においては絹織物や綿織物の展開の上に、その毛織物生産への転換という過程がみられた。

尾西織物の起源は、確実な文献を欠くというきらいはあるものの、起村（後の愛知県尾西市、現在の一宮市）を中心に織物業が勃興し、これが漸次発達したのであった。起村においては、既に織田信長の時代にその萌芽があらわれていたという³⁸。天正年間における木曾川改修の結果、起の地に村民が集合し、絹織業を開始したのであり、当時、絹屋起村と称された³⁹。

また、綿織物に関していうと、尾張地域で棉作が開始された正確な時期は明らかではないが、隣接する三河地方が日本最初の木綿栽培地であったという関係上、比較的早期に棉作が開始されたものと考えられる⁴⁰。それ以前には、古く奈良時代より尾西地方はすでに織物の産地として知られ、当初は麻織物、つぎに尾張八丈（「八丈絹」）など、絹織物の産地として栄えていた⁴¹。

また、近世期をつうじて、絹織物の生産とともに棉作の発展と機業の展開がみられ、徳川時代中期以降になると、縞木綿生産が尾西地域の農民層に広汎に展開するようになった。そして19世紀前半、文政の頃から絹綿交織の結城縞の織出もみられるようになり、高級衣料として都市町人層に売捌かれることになった。このように近世期においてすでに尾西

産地では、木曾川での舟行の便による取引の円滑さといった地勢的な好条件⁴²にも支えられ、典型的な家内工業の精華として⁴³発展した。

では次に、明治維新以降の尾西織物業の動向についてみることにしよう。近代（維新後）の尾西産地においては、養蚕の発展と絹綿交織物生産の増加がみられ、その一方で輸入綿糸ないし国内紡績糸の利用増加に伴う棉作の衰退がみられた。製品としては結城縞などの縞物中心であり、1880年の「中島郡織物印紙帳用願」によると、総生産額の約4割が結城縞、棧留縞であった。白木綿が少なく、縞物が多かったことが特色としてあげられる⁴⁴。

同地の機業に大きな改革をもたらす端緒となったのは、1891年に発生した濃尾大地震であった。この震災により、棉作は大打撃を受けたが、再建に際し改良織機の導入を行い、大作業場の建設を行うものもあらわれるなど、尾西機業の構造にも大きな変化が与えられることになった⁴⁵。たとえば有力機業家である鈴木鎌次郎の工場では、濃尾震災後ただちに大工場を新設し、率先してバタタン機を採用したという⁴⁶。しかし、大型機械の導入は一部では進んだものの、多くの零細機業者には普及しなかった。遠州のような他産地が、織機の動力化による技術的近代化の確立をはかったのに対し、尾西地域は早急に変革することなく、製品の多様化、複雑化によって市場の開拓を図ることを当時は選択したのであるが、技術水準の停滞は次第に販路の縮小を招き、1900年代に入ると生産の減少が顕著な傾向としてみられるようになった⁴⁷。

このようななかで、明治中期から大正初期にかけて、尾西機業地では毛織物産地への方向転換がおこなわれるようになる。この転換にあたっては、後述するように、尾西機業家、整理業者、販売関係者など、尾西織物業の生産・流通・販売にかかわる多くの主体による努力が大きな役割を果たした。

4. 毛織物への製品転換と尾西機業地

尾西地域における毛織物への関心は、1882年ころに起村出身の渡辺弥七が名古屋において綿毛布を製造したことにはじまるといわれる⁴⁸。その後濃尾大震災（1891年）を契機として綿毛布業が起り、赤毛布が生産された。この頃から、尾西地方において、綿織から毛織への転換を志すものが現れた。1892、3年頃には起村の寛直八が経糸に綿糸、緯糸に毛糸を使用した交織物をつくり、1893年に開催されたシカゴ万国博覧会に出品したという⁴⁹。のちに寛は、1899年に経綿糸60位の単糸に、緯52位の毛単糸を用いたメカニク

織二幅物など絹毛・綿毛交織物を生産し、東京三井呉服店へ出荷している。ほかに、19世紀末には中島郡三条（現在の一宮市）の加藤平四郎が着尺用セルを製織し、一宮の機業家も名古屋の愛知物産組などと協力して綿毛交織のセル地および揚柳御召浴衣地を試織した⁵⁰。

このように、第二次企業勃興期前後から、尾西地方においては毛織物への関心および転換の方向性が模索された。こうした状況のなかで、尾西地域において本格的に毛織物への転換を図るということへの先駆的な役割を果たしたのが、片岡春吉であった。

片岡春吉は、1872年に岐阜県養老郡に生まれ、海東郡津島町（現在の津島市）において箆製造を営む家に婿養子に入ったが、その後織物製造業に転じた⁵¹。そして、足利など全国の織物産地を視察するなかで毛織物の将来性を見込み、毛織物の国産化を志した⁵²。1896年には、箆納入先の一つであった東京モスリン会社に入社し修業した。1898年3月に帰郷し、はじめに綿毛交織のモスリンを試作したが、整理染色の技術を欠き、失敗に終わった。その後、学者や専門家の意見を聞きながらセルジスの試織に着手した。そのプロセスにおいては、二巾手織機を独創し、毛焼にはアルコールランプを拡大した瓦斯焼機を独創し、大型アイロンで艶出ロール機の代用をしたという⁵³。このようにして織り出された毛織物は、1901年11月に開催された第5回愛知県五二品評会に出品され、銅賞牌を獲得したが、これは国産として最初のセルジスであった⁵⁴。さらに、1902年には第2回全国製産品博覧会、1903年には第5回国内博覧会で賞牌を授与された⁵⁵。このように、片岡は尾西だけでなく、日本の毛織開発の先駆的存在として位置づけられるのであった。

片岡の技術開発にも触発され、19世紀末から20世紀初頭にかけて、尾西においては綿織物、絹織物業者のなかから、毛織物への製品転換を図るものが現れはじめた。のちに尾西機業地における有力な毛織物機業家となる鈴木鎌次郎は、1905年には絹毛交織セルの織布に成功し、同じく有力機業家となる山本直右衛門も、綿毛セルの製織に成功した⁵⁶。こうして、大規模機業家たちが事業の安全性を証明しつつ、毛織物製造へと転換していった。また同時に、染色技術の開発もみられ、生産の最終工程である染色整理作業の発達がみられた。詳細は後述するが、1901年に愛知県立工業学校が設立され、初代校長として着任した柴田才一郎による技術の教育・伝播も大きな役割を果たした。

次に、尾西機業地における力織機化の過程について概観しよう。ここで、尾西産地毛織物業における大型機械の導入過程は、四幅織機の導入・設置の過程と置き換えることができる。では、毛織物業、とりわけ中小規模の織物工場の多い産地毛織物業において四幅織機を導入する必要性は、どのような点に求められるのか考えてみると、たとえば、二幅織機に代わり四幅織機を導入すれば、同数の女工で同一の時間におよそ2倍の能率が上がることになり、さらに四幅織機は洋服地の製織にも適する。また、尾西機業地における四幅

織機導入には大阪の芝川商店が大きく尽力したが、四幅織機を導入すれば、その芝川商店とも有利な条件で取引することができるようになる⁵⁷。このように、労働力の節約や、大規模商社との取引、また取扱品目の増加といった点からも、尾西機業地において四幅織機を導入するメリットは大きかった。折りしも1914年に第一次世界大戦が勃発すると、毛織物の輸入が断絶し、国産品愛用が一層高唱された。国内需要が急増したために、尾西産地における生産能率はより上昇し、さらに力織機化へのモチベーションは高揚した。そのため、1910年代後半になると、中小機業家たちのなかで、四幅織機を導入する動きが活発にみられるようになり、本格的な力織機化への道が開かれていった。また、県立愛知工業学校（現・名古屋工業大学）に加えて、1915年には起町において町立染織学校（現・県立起工業高校）が開設され、こうした教育機関の貢献も大きなものであった。

四幅織機については、上述の尾西機業地における先駆的な機業家である片岡春吉はすでに、1906年にはドイツへ四幅動力織機および染色整理機械一式を発注し、1909年には到着しており⁵⁸、そのほかにも1913年には一宮の木全角次郎がドイツ製四幅動力織機を設置するなど先駆的な事例がみられた。木全は英ネルの試織を開始し⁵⁹、それは後の洋服地生産の飛躍的な拡大の端緒として位置づけられる。

四幅織機導入過程においては、まず海外からの機械輸入がはかられたが、第一次世界大戦の開戦より毛織物だけでなく、織機そのものについても入手が困難な状況になったため、その後和製織機（四幅）の製作が開始された。

ジョージ・ホジソン社製織機を見本とした平岩製作所（愛知県碧海郡）製力織機を皮切り（1916年）に、国産機械の製作が行われ、翌年からは天満小森製力織機（大阪）、名古屋大隈製力織機（名古屋）など、国産力織機が生産が活発化した。そして、尾西産地でも積極的に国産力織機の導入が図られ、四幅織機と二幅織機の併用により生産品目、生産量も拡大し、一層競争力のある産地へと成長していった。

ここで、具体的な事例として、鈴木鎌次郎経営の「鈴鎌毛織工場」における四幅織機導入過程について、資料「機械ニ関スル綴」（鈴木貴詞家所蔵『鈴鎌毛織資料』）に基づいて明らかにしよう。この「機械ニ関スル綴」は、1917年から19年にかけての時期を中心とする、鈴木鎌次郎経営の「鈴鎌工場」の織機・関連部品取引について記されたものである。鎌次郎の先代は徳川時代末期ごろ荊谷安賀新田村で米屋を営んでいたといい、「鈴鎌工場」は、1877年3月ごろに鈴木鎌次郎が三条村で始めたものである。鎌次郎は日露戦争に出兵し、その際に見た経験から日本での洋服・毛織物の時代の到来を確信し、帰郷後1907年ころからは毛織物製造に腐心していった。尾西地域には早い時期、1914年には電力が入ったため、力織機採用が容易になっていた。鈴鎌工場では1922年には手織機を廃止し、以来二幅、四幅動力織機で製造をおこなった⁶⁰。なお、鈴木鎌次郎は1923年3月から

1927年1月まで、尾西織物同業組合の組長の職にあり、組長を退いたあとも相談役の地位にあった⁶¹、尾西における機業家の中心的人物であるといえる。

資料「機械ニ関スル綴」によると、鈴鎌工場においては同時期において手織用ビームや力織機用ビーム、三・四幅整経機、B号中耳器、力織機用絲編金筈などの機械・部品を桐生（群馬県）にある桐生製作所から購入している⁶²。桐生は近世期より絹織物の産地としてよく知られ、そこで製作される機械・部品は絹製品への利用を前提として作られたものであったが、毛織物生産のために絹織用の機械・部品を購入した理由として、毛織用機械・部品の国産化が未だ進んでいない時期において、すでに国産の展開がみられた絹織用の機械・部品を毛織用に応用することによって、その代用とするためであったと考えられる。それは、資料中に記された、以下の内容からも理解できる。

(資料⁶³)

・・・先日御照会頂きました弊社製は生糸用にてポビンも小さく太き綿糸又は毛糸などには如何かと存候へ共右にて宜敷候はば見積申上ぐ可く候・・・
次に同時御注文の中耳器は・・・取急ぎ製作可仕取付金物は貴方にて機械に合せ御便宜御製作被下・・・
(1917年6月13日 桐生機械株式会社)

また、毛織用に機械の改良を依頼する場合には、辞退されることもあった。

(資料⁶⁴)

・・・繰返機の件に付いて・・・大体は同じ様には候へ共貴所のは綾振装置其他特別のものに有之目下先約多忙の折・・・不本意ながら辞退申し上げる・・・参考迄に右標準型の・・・尤も此式にては絹糸の外は綿糸、毛糸には不適當に・・・
(1917年8月14日 桐生機械株式会社)

このように、国産機械が未発達な状況のなかで機械化の過程にあつては、絹織用の機械・部品の応用がみられたが、試行錯誤のなかですすめられた作業は、多くの困難をとまっていた。しかしながら、「新たな織物」である毛織物生産への意欲により、創意工夫をおこなっていったということが理解できよう。そのほかにも1917年8月には三井物産名古屋支店機械掛より、芝浦製作所製電動機（価格1,225円）が出荷されていることなどもわかる⁶⁵。

また、鈴鎌工場では1917年にはイギリスのジョージ・ホジソン社から四幅の両四丁杼の動力機械を購入し手織機と併用した、とされているが⁶⁶、このことは例えば1917年10

月に三井物産名古屋支店機械掛をつうじてホジソン社の機械を購入したという記録⁶⁷からも明らかになる。なお、ホジソン社製機械の導入にあたっては、木製経糸ビームを鉄製に変更するように、三井物産をつうじて要請していたということもわかる⁶⁸。そのほかにも、織機導入に関しては、高島屋飯田との取引も確認される。なお、ホジソン社製機械に代表される英国製機械の購入に関しては、その後1918年、1919年にも取引が確認されるが、その一方で以下の資料からも明らかのように、第一次大戦中の輸入断絶の状況が改善されるなかであっても、原料騰貴などによって、入手は困難をきわめた。

(資料⁶⁹)

・御注文の・英国ボイド会社製撚糸機械に就いてはご契約の当時以来、時局の影響を受け材料の供給困難、製作の自由を得ざる理由の元に今回の休戦に到るまで遂に機械の引渡しを得ざる次第に御座候処今回の休戦と同時にロンドン弊支店に対し直に此等注文の積出に付き電報を以て・・・同製作所より支店を通じて下の通り回答有・・・此契約品に対する契約値段の五割増値を承認さるるならば直に製作に着手し得ることが出来る旨の意味に候・・・尚此値段は「ボイド」会社に限らず一般の機械製造会社が探らんとするものの如く既に本邦註文の紡績機械に付いても此議ある次第に付き・・・此値増も戦争の結果による異常なる原料騰貴による事にして不可抗力に依りたる結果・・・注文者の御負担として御承認に賜り度・・・

(1919年1月 高島屋飯田株式会社より鈴鎌工場宛)

輸入機械の入手困難な状況のなか、上述したように、日本では1916年における平岩式力織機の製作以降、国産力織機の開発がすすんでいた。鈴鎌工場でも国産の平岩製作所の四幅動力織機や天満小森製作所の上ドビーの両四丁杼の動力機械を採用したとされているが⁷⁰、こうした国産機械の導入については、資料からも、1917年7月における天満小森製作所からの織機注文請書（綾織力織機5台）、1919年6月を納期とする綾織力織機12台購入の注文書などから明らかになる⁷¹。なお、鈴鎌工場は尾西地域における力織機化、とりわけ国産織機の導入に関しては先駆的な事例として位置づけられる⁷²が、時期は少し遅れるものの、同様の力織機化の動きは尾西機業地における他の工場でも見られた。このようにして、尾西機業地では手織機から動力織機への転換がはかられていった。

5. 尾西機業地の飛躍的な発展

上記のような過程をへて、尾西産地においては力織機化がすすみ、四幅織機の導入に伴って製品の多様化が志向された。力織機化の本格的な始期としては、上述のように第一次大戦前後の時期を指摘することができるが、その後も尾西機業地は飛躍的な発展をとげていくことになる。第1表は、1922年から31年にかけての尾西機業地における製品種類別生産額を示したものであるが、一つの転換点として1929年頃の時期をあげることができる。この時期以降、製品の一層の多様化がみられ、一方での本セル生産の減少がみられる。とはいえ、服地生産の飛躍的な増加はみられるものの、着尺セル製品の全くの後退を意味するものではないということもわかる。また、帽子地や児服地の生産、カシミヤ、メルトンの生産など、昭和期に入ると製品の種類も増えていくということがわかる。

こうした多品種化が実現したのは、多品種少量生産が可能な、中小規模経営の強みであったと理解することができよう。詳細な分析は別稿に委ねることにするが⁷³、上述の鈴鎌工場でも卸製品の多様性がみられ⁷⁴、東京・大阪・神戸など販路の拡大もみられ⁷⁵、尾西機業地が従来の地方機業地から急速に近代的毛織工業の一大産地へと転換し、発展していった。

ここでは総合的な発展に不可欠であった企業家たちの動きについて、機業家以外の主体の動きにも注目してみていくことにしよう。尾西機業地が、日本有数の毛織物産地に成長できたもう一つの要因としては、整理染色過程の向上、流通商社による販売方法の工夫、教育の充実といった、多面的な発展がみられたという点に関係しているといえる。

尾西機業地においては、大企業による毛織物生産ではみられないような独特の分業体制があり、資本の回転が早く、長く商品をねかせないという利点があった。染色整理業も、分業の一つであり、尾西では艶金のような有力な整理部門業者が存在した。のちの艶金興業の始祖となる墨字吉は、1889年より家業の艶屋（織物艶出し）を継いだ。上述の1901年開催の第5回愛知県52品評会における足利織物の品質の高さにも触発され、整理の重要性を痛感した機業家たちからの要請に応じ、二幅セルなどの整理を本格的に開始した。1900年代、1910年代以降大きく進展し、1911年には墨合名会社、1924年には艶金興業株式会社が設立され、1930年には艶金興業は墨合名を合併した。このようにして、艶金興業は尾西機業地における整理業者の中心的な存在として成長していった。

また、綿織物の仕上整理工程などと比較して、毛織物の仕上整理には高度な技術が必要であるが⁷⁶、その技術の伝播には、1901年9月設立の県立愛知工業学校初代校長・柴田才

第1表 尾西織物組合・毛織物種別生産額 単位：円

	本セル	ウルライン	アムンゼン	コート地	サージ	服地	カシミヤ	メルトン	児服地	帽子地	袴地	モスリン	英ネル	その他	小計
1922年	16,499,675				180,338	326,116					683,427		951,312	844,768	19,485,636
1923年	17,922,406				124,781	22,916					747,152		504,416	747,387	20,389,431
1924年	21,379,563				465,493	103,221					430,082		1,475,944	554,906	24,520,708
1925年	20,270,703				1,955,833	1,993,718					743,783		1,148,710	9,892	26,370,680
1926年	23,205,503				6,300,771	2,208,298					903,914		1,636,043	189	34,457,145
1927年	20,083,155				10,080,960	3,308,635			79,704		659,274		1,456,163	17,416	35,898,795
1928年	22,214,078				14,584,183	5,104,223			44,967		674,190		1,513,760	19,444	44,480,042
1929年	19,168,757				16,063,335	8,900,013			154,781		487,450		183,110	28,642	45,362,013
1930年	9,413,526	472,663	3,324,572	676,811	14,180,964	6,390,074	1,109,450	1,966,023	733,945	308,986	344,671	31,831	1,643,514	49,706	40,646,736
1931年	5,809,634	394,765	4,775,471	277,822	10,862,532	8,051,453	1,581,933	2,594,522	636,146	111,146	134,426		1,836,412	23,539	37,089,801

出典：『尾西織物要覧』より筆者作成

一郎の貢献が大きかった。東京高等工業学校教授から赴任した柴田は、1895年から2年間ドイツに留学し、毛織物及び絹織物を専攻して研究をおこなった⁷⁷。尾西地域における機業家、艶屋などは「一日会（ついたちかい）」を組織し、毛織物に関する研究をおこなったというが、ここに柴田校長は招かれ、学問的な講和を通じて知識を伝播した⁷⁸。また、工業学校では実習場がつくられ、欧米から最新式の織機や染色整理機を取り寄せて毛織物の研究がおこなわれた。授業の教材資料として民間生地織物の整理も引き受ける体制をつくられ⁷⁹、片岡春吉、墨清太郎（墨宇吉長男）ら機業関係者も柴田に教えを乞い、それぞれの技術を磨いた⁸⁰。1908年には、墨清太郎は県立愛知工業学校の支援を受けて、英・独より脱水・起毛・煮絨・乾燥などの機械を導入している。このように、柴田による啓蒙、教育機関による技術的な支援は尾西機業家たちに大きな影響を与え、後の産地発展への礎を築ききっかけを与えたのであった。

次に四幅織物研究会について述べることにしよう。尾西機業地では、1910年代半ばから本格的な力織機化が進み、その普及にともなう発展の糸口がつかみかけられたが、1920年恐慌、さらにはヨーロッパからの毛織物輸入の再開の影響もあって、市価が崩落し、販売の不振に苦しむことになった⁸¹。このようななかで、尾西機業家のなかから、輸入品に十分に対応できるような優れた製品をつくり、量産化を図らなければならないという意見がでてきた。こうした動きの中心となったのは、鈴木鎌次郎（鈴木毛織工場経営）、加藤善一郎（枅善合名会社代表）、問屋筋の伊藤長一郎（国島商店支配人）らであった⁸²。そして、尾西の機業家を中心に、同業者有志を組織し、東西の糸商・羅紗商中の有力者にも謀り、組合（尾西織物同業組合）事業の「別働隊」として1923年に「愛知県四幅毛織物研究会」が組織された。メンバーは集散地問屋・機業家・整理業者・織機メーカーなど多岐にわたり、後援者として丸紅商店、芝川商店、宇佐見商店など東西の有力問屋が参加した⁸³。この研究会の初代会長には鈴木鎌次郎が就任し、「輸入防遏ト海外輸出トヲ以テ終局ノ目的トシ⁸⁴」た。

1923年8月10日に第1回会合が開かれ、以降、商社、問屋、機業家、染色整理業、糸染、織機製造業者等、幅広い顔ぶれが参加し、毎月開催された。たとえば、芝川商店など有力問屋の輸入する毛織物のなかから、見本カードを作成し、研究された。

そのほかにも高級服地の研究会の実施、東京松屋など展示会への出展、機業家による洋服地の新たな提案・開発により輸入品への対抗を目指した。研究会による啓蒙によって四幅織機に切り換える企業も少なくなく、四幅織物研究会の活動は5年程度の短い期間にすぎなかったが、多くの機業関係者が一体となった製品生産の向上への努力は、後の尾西機業地の大きな発展の原動力となった⁸⁵。

第一次大戦ブーム後の不況側面においては、格安の輸入品との競争にさらされることに

第2表 愛知県郡市別工場数及生産額（1933年）

郡市名	工場数	生産額（単位：円）
名古屋市	91	10,646,407
一宮市	41	7,022,657
東春日井郡	5	2,558,250
西春日井郡	7	1,061,610
葉栗郡	63	6,269,154
中島郡	485	50,196,808
海部郡	230	24,840,863
知多郡	2	812,838
宝飯郡	3	404,359
丹羽郡	8	602,819
碧海郡	1	158
合計	936	104,415,923

出典：愛知県編，1937，『愛知県の毛織服地』より筆者作成

なったが、こうしたなか尾西機業地では、機業関係者を中心によりよい製品をつくり、販売するための創意工夫がはかられていった。その一つの事例として、本節では上述のように四幅織物研究会を取り上げたが、産地が一体となった努力のなかで、大正後期から昭和初期にかけて、尾西機業地は大きく伸長し、日本における有数の毛織物産地として成長していくのであった。第2表は、1933年中の愛知県内における郡市別工場数及生産額を表したものである。

これを一覧して分かるように、尾西機業地である中島郡（現在の一宮市）の工場数、生産額が突出しているということが理解できよう。1929年には全国における毛織物生産額に占める愛知県の割合は37.8%であったが、それが1936年には65.1%と、全国の生産額の約3分の2を占めるまでに成長した⁸⁶。1937年以降、戦時期に突入すると、毛織工業も統制経済の影響下に入り、合理化が進展し、統制の緩和は、戦後、1950年の配給統制、価格統制の廃止を待つことになる。しかしながら、戦後においても日本における毛織物産業の一大産地として尾西産地が発展しえたのは、戦前期からの「毛織王国・尾西⁸⁷」としての基盤の確立に基づくものであったと考えられるのである。

6. おわりに

本稿では、日本において近代的な繊維産業として位置づけられる毛織物工業の展開について、その始期から戦前期をつうじた展開について概観しつつ、主要な産地である尾西機業地を事例として、①近世期から続いた綿（絹）織物業から毛織物業への転換の過程、②毛織物業における力織機化（機械化・近代化）の過程、③それに関わった企業家たちの動きに光をあてながら論じた。

古くから絹織物や綿織物といった、在来的な織物の産地として展開していた尾西機業地では、明治中期以降、大正期にかけて毛織物生産への産地一体となった製品転換がみられ、その後国内における毛織物生産の一大産地へと成長した。そこでは地元機業者だけでなく柴田才一郎のような技術者兼教育者、大阪の芝川商店のような流通業者といった、多くの主体の努力、協力がみられたのであった。

ところで、尾西産地織物業の特色は、小規模経営と地域的集中との2点であるといえる⁸⁸。尾西における毛織物工業は、中小企業家の手により開拓され、昭和戦前期をつうじて大きく発展した。そして、小規模経営の各主体は、尾西織物協同組合に代表されるような組合を組織し、協力することによって大企業にも匹敵するような、またはそれを上回るような生産・流通を行うことが可能となった。さらに、毛織物工業は近代的な繊維産業であるものの、尾西産地織物業の展開に関していうならば、従来の在来的な産地織物業（絹織や綿織）の発展を前提として、それが近代的な毛織物工業に転化し、発展したという特色を指摘することができる。この点については、今後より精緻な論証をおこなう必要性があるものの、本稿における検討からは、在来産業が、在来的な経済発展の特色を残しつつ近代産業に転化・昇華していったという発展経路を確認することができる。

本稿では、今までの研究史上では必ずしも十分には明らかにされてこなかった戦前期における国内毛織物工業の動向、尾西機業地における毛織物工業の展開、生産や流通の動向、機業にかかわる各主体のマクロ的な動向について論じてきた。大正期にみられた力織機化についての具体的な検討、昭和期にみられた製品開発のあり方についての具体的な検討といった、各主体に関するマイクロ的な実証分析・よりふみ込んだ個別分析、さらに毛織物工業の展開についての諸論点に関するふみ込んだ論証については、今後の研究課題とすることにした。

[付記] 本稿は、社会経済史学会第86回（2017年度）全国大会における報告（石井里

枝・橋口勝利「尾西織物産地の工業化と機業家－綿織から毛織への製品転換の過程を中心に－」および明治大学ビジネス・イノベーション研究所研究例会における報告（石井里枝「日本における毛織工業の展開と産地織物業－尾西産地を事例として－」）に基づくものである。なお、本稿は2017～2019年度日本学術振興会科学研究費基金・若手研究（B）「戦前期尾西織物業の展開と地域の産業化に関する社会経済史的研究」（課題番号：17K13770）の成果の一部である。

注

- 1 なお、尾西機業地では、1900年に尾西織物同業組合が組織された。これは現在の尾西毛織工業協同組合につながるものである。
- 2 日本繊維協議会編、1958、『日本繊維産業史 各論篇』繊維年鑑刊行会、807。
- 3 尾西毛織工業協同組合編集委員会編、1992、『毛織のメッカ尾州－尾西毛織工業九十年のあゆみ』尾西毛織工業協同組合、16。なお、現在は愛知県一宮市、稲沢市となっている。
- 4 日本繊維協議会編（1958：280）。
- 5 尾西毛織工業協同組合編集委員会編（1992：16）。なお、1970年代に入ると毛織物は日米貿易摩擦の第一の対象となり、71年には対米輸出自主規制が実施された。その後は繊維産業における生産拠点の転換（アジア NIES などでの生産）などの影響により、1980年代後半からは輸入産業に転じ、尾西機業地でも多くの中小企業は転廃業に踏み切っていった（同上：15。）
- 6 佐々木秀賢、1936、『毛織工業』一宮工業会
- 7 大中満洲男、1943、『毛工聯史』大日本毛織物工業組合联合会
- 8 伊東光太郎、1957、『日本羊毛工業論』東洋経済新報社
- 9 名古屋通商産業局編、1955、『中部羊毛工業の実態と諸問題』中部産業連盟
- 10 『日本毛織六十年史』『日本毛織百年史』など。
- 11 森徳一郎編、1939、『尾西織物史』尾西織物同業組合
- 12 玉城肇、1957、『愛知県毛織物史』愛知大学中部地方産業研究所
- 13 日本繊維新聞社一宮支局編、1958、『尾西毛織近代史』尾西毛織工業協同組合
- 14 塩澤君夫・近藤哲夫、1985、『織物業の発展と寄生地主制－明治期における尾西地方の実証的研究』お茶の水書房。
- 15 たとえば、『尾西織物案内』、『尾西織物要覧』『愛知県織物要覧』『毛織のメッカ尾州：尾西毛織工業九十年のあゆみ』などがある。
- 16 名古屋通商産業局、1955、『中部羊毛工業の実態と諸問題』中部産業連盟、26。
- 17 同上。
- 18 D. T. Jenkins and K. G. Ponting, 1987, "The British Wool Textile Industry 1770-1914" Scolar Press. 2-3.
- 19 名古屋通商産業局（1955：26）。
- 20 名古屋通商産業局（1955：26）。
- 21 山田俊一、1937、『毛織要覧（昭和12年）』大日本毛織工業組合联合会山田、1。
- 22 まず、1854年に日米和親条約を締結したアメリカとの間に、1858年に全14条、附属貿易章程7条からなる日米修好通商条約が締結され、その後アメリカに続いてオランダ、ロシア、イギリス、フランスとの間に一連の修好通商条約が締結された。これらの通商条約では、神奈川、長崎、箱館、新潟、兵庫の開港が規定され、このなかでまず1859年に神奈川、長崎、箱館が開港し、兵庫は1868年、新

- 潟は1869年に開港した(杉山伸也, 2012, 『日本経済史』岩波書店, 134-136)。
- 23 名古屋通商産業局(1955:26)。
- 24 なお、幕末開港期において、大阪には5軒の大洋反物問屋があり、これらの洋反物は総て長崎に行き、それを船送りにし、店々で入札販売をしたが、長崎に輸入される洋反物の8,9分までがこの5軒問屋の手を経て仕入れられていたという(名古屋通商産業局 1955:26)。
- 25 楫西光速編, 1964, 『現代日本産業発達史 XI 繊維 上』現代日本産業発達史研究会, 48-50。
- 26 同上, 49。
- 27 同上, 165。
- 28 同上, 165, 名古屋通商産業局(1955:27), 大中満洲男編, 1943, 『毛工聯史』大日本毛織物工業組合聯合会, 3。
- 29 名古屋通商産業局(1955:27)。
- 30 楫西光速編(1964:165)。
- 31 百年史編纂室編, 1997, 『日本毛織百年史』日本毛織株式会社, 25-26。
- 32 同上, 27-28。
- 33 政府は、輸入品阻止と国内羊毛工業の保護育成のために関税改正に着手した。1896年4月より羊毛の輸入税が無税となり、1899年1月からは毛糸輸入税従価10%, 毛織物は15%に上げられた(百年史編纂室編(1997:40))。
- 34 百年史編纂室編(1997:39-40)。
- 35 同上, 40。
- 36 名古屋通商産業局(1955:28)。
- 37 楫西光速編(1964:350-351)。
- 38 廣瀬長雄編, 1932, 『尾西織物案内』尾西織物同業組合, 7。
- 39 同上, 8。
- 40 玉城肇, 1957, 『愛知県毛織物史』愛知大学中部地方産業研究所, 31。
- 41 尾西毛織工業協同組合編集委員会編(1992:35)。
- 42 廣瀬長雄編(1932:9)。
- 43 同上。
- 44 百年史編纂室編(1997:99)。
- 45 玉城肇(1957:70)。
- 46 同上, 71。
- 47 同上, 78-81。
- 48 尾西毛織工業協同組合編集委員会編(1992:39)。
- 49 同上, 40。
- 50 同上, 40, 森徳一郎編, 1939, 『尾西織物史』尾西織物同業組合, 100。
- 51 佐々木秀賢, 1936, 『毛織工業』一宮工業会, 44。
- 52 尾西毛織工業協同組合編集委員会編(1992:41)。
- 53 森徳一郎編(1939:100)。
- 54 同上, 101。
- 55 尾西毛織工業協同組合編集委員会編(1992:43)。
- 56 佐々木秀賢(1936:48)。
- 57 同上, 50。
- 58 尾西毛織工業協同組合編集委員会編(1992:59)。
- 59 同上, 61。

- 60 尾西市史編さん委員会編, 1998, 『尾西市史』通史編上巻, 934-935。
- 61 廣瀬長雄編 (1932: 29, 31)。
- 62 「機械ニ関スル綴」(鈴木貴詞家所蔵『鈴鎌毛織資料』)
- 63 同上。
- 64 同上。
- 65 同上。
- 66 尾西市史編さん委員会編 (1998: 935)。
- 67 「機械ニ関スル綴」(鈴木貴詞家所蔵『鈴鎌毛織資料』)
- 68 同上, 1917年5月31日の記録。
- 69 「機械ニ関スル綴」(鈴木貴詞家所蔵『鈴鎌毛織資料』)
- 70 尾西市史編さん委員会編 (1998: 935)。
- 71 「機械ニ関スル綴」(鈴木貴詞家所蔵『鈴鎌毛織資料』)
- 72 尾西地方で最初に国産四幅織機を備え付けたのは, 鈴鎌工場であったという(尾西毛織工業協同組合編集委員会編 (1992: 76))。
- 73 なお, 第1表の分析からは, 昭和恐慌の影響を看過することはできないと考えられる。別稿において詳しく論ずることにしたい。
- 74 「製品仕訳帳」(鈴木貴詞家所蔵『鈴鎌毛織資料』)
- 75 「製品販売帳」(鈴木貴詞家所蔵『鈴鎌毛織資料』)
- 76 佐々木秀賢 (1936: 64)。
- 77 艶金興業百年史編纂委員会編, 1989, 『墨敏夫-知と技の軌跡100年』艶金興業株式会社, 18。
- 78 同上, 19。
- 79 同上, 20。
- 80 尾西毛織工業協同組合編集委員会編 (1992: 60)。
- 81 同上, 92。
- 82 同上, 93。
- 83 同上, 94。
- 84 『愛知県四幅毛織物研究会要覧』(鈴木貴嗣家所蔵)
- 85 尾西毛織工業協同組合編集委員会編 (1992: 96)。
- 86 名古屋通商産業局編 (1955: 35)。
- 87 尾西毛織工業協同組合編集委員会編 (1992: 16)。
- 88 佐々木秀賢 (1936: 106)。

【参考文献】

1. 愛知県編, 1937, 『愛知県の毛織服地』愛知県
2. 伊東光太郎, 1957, 『日本羊毛工業論』東洋経済新報社
3. 大中満洲男, 1943, 『毛工聯史』大日本毛織物工業組合聯合会
4. 梶西光速編, 1964, 『現代日本産業発達史 XI 繊維 上』現代日本産業発達史研究
5. 佐々木秀賢, 1936, 『毛織工業』一宮工業会
6. 塩澤君夫・近藤哲夫, 1985, 『織物業の発展と寄生地主制-明治期における尾西地方の実証的研究』お茶の水書房
7. 杉山伸也, 2012, 『日本経済史』岩波書店
8. 玉城肇, 1957, 『愛知県毛織物史』愛知大学中部地方産業研究所
9. D. T. Jenkins and K. G. Ponting, 1987, “The British Wool Textile Industry 1770-1914” Scolar

Press.

10. 艶金興業百年史編纂委員会編, 1989, 『墨敏夫－知と技の軌跡100年』艶金興業株式会社
11. 名古屋通商産業局編, 1955, 『中部羊毛工業の実態と諸問題』中部産業連盟
12. 日本毛織社史編集室編, 1957, 『日本毛織六十年史』日本毛織株式会社
13. 日本繊維協議会編, 1958, 『日本繊維産業史 各論篇』繊維年鑑刊行会
14. 日本繊維新聞社一宮支局編, 1958, 『尾西毛織近代史』尾西毛織工業協同組合
15. 尾西毛織工業協同組合編集委員会編, 1992, 『毛織のメッカ尾州－尾西毛織工業九十年のあゆみ』
尾西毛織工業協同組合
16. 尾西市史編さん委員会編, 1998, 『尾西市史』通史編上巻
17. 廣瀬長雄編, 1932, 『尾西織物案内』尾西織物同業組合
18. 百年史編纂室編, 1997, 『日本毛織百年史』日本毛織株式会社
19. 森徳一郎編, 1939, 『尾西織物史』尾西織物同業組合
20. 山田俊一, 1937, 『毛織要覧(昭和12年)』大日本毛織工業組合联合会
21. 「機械ニ関スル綴」(鈴木貴詞家所蔵『鈴鎌毛織資料』)
22. 『愛知県四幅毛織物研究会要覧』(鈴木貴詞家所蔵)
23. 「製品仕訳帳」(鈴木貴詞家所蔵『鈴鎌毛織資料』)
24. 「製品販売帳」(鈴木貴詞家所蔵『鈴鎌毛織資料』)